２０２３年６月１１日　青戸教会　説教『言い訳をする』　　高橋克樹牧師

聖書　サムエル記下７章４～１６節、ルカ福音書１４章１５～２４節

イエスの話を聞いていた客の一人が『神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう』と言いました。イエスは、すぐ前のところで、神の国に招かれていることを宴会に招かれている客が上席を選ぶ様子にたとえて、上席を選ばずに末席に座るようにすることを話されました。最初末席に座ると、招いた人はもっと上席に座るように促されるという教訓じみた譬えを話されたのです。その話を喜んで聞いていた客の一人が神と一緒に宴会に出席できることをとても喜んだのですね。

イエスは神の国に招かれていることを単純に喜んでいるこの人は１４章冒頭の記事によるとファリサイ派の人物です。彼はファリサイ派の人物ですので、自分こそが神の国の食事に招かれるべき人間だと思っているのです。律法を守る自分の功績の積み重ねが神の国の宴会に招かれることにつながっていることを少しも疑うことがない人物です。

このように見てくると、７節以下で『招待を受けた客が上席を選ぶ』（７節）譬えが、ファリサイ派の人物に向けられたものだということに気づかされます。イエスはファリサイ派の人物が神の国に招かれた際に行う上席選びを批判しているのです。また、イエスは招待する側の人にも、昼食会や夕食会に友人や兄弟、親戚や近所の金持ちを招いてはならない。なぜなら、彼らは招かれたお礼に、食事会に招く返礼をするからであると言います。

このような返礼は神の国では不要なものだというのです。ところが、１５節以下に登場するファリサイ派の人物は、自分が神の国に当然招かれていることを誇るように喜んだのでした。おそらく、自信満々にこれ見よがしに神の国での食事に自分が招かれていることを吹聴したのでしょう。

それに対してイエスは、宴会に招待されても断る人の話をするのです。当時のユダヤでは食事会の正式な招待は２回に分けて行われました。一度目の招待を受けた人が『宴会の時刻になった』（１７節）時になされる２回目の招待を断ることは非常に無礼なことだとみなされていました。けれども、『最初の人』（１８節）と『ほかの人』（１９節）は買った土地や牛のことを理由に断ります。３人目の人は、結婚生活を理由に断りました。ここでの「断る」という言葉は「口実を設ける」「言い訳をする」という意味です。

でも、この言い訳をする理由は辻褄が合わないものです。土地や牛は買う前に見に行くものです。まして既に買ったものなら、宴会の後でも見に行くことはできます。新婚も宴会を断る理由にはならないものです。このような言い訳を僕から聞いた主人は怒りました。そこで、主人は町の広場や路地に行って貧しい人や体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人を連れてきなさいと命じます。それでも、宴会の席が余っていたので、さらに主人は人を招くように命じます。そして主人は言うのです。『あの招かれた人たちの中で、わたしの食事を味わう者は一人もいない』と言って、２回目の確認の招待の際に断った人たちは主人の食事を味わうことはないと言明するのです。

この譬え話に登場する主人は神さまのことです。僕はイエスさまのことです。最初招かれていたのに、確認の招待を言い訳をして断ったのはファリサイ派の人たちのことです。

神は自分は義人だと自認している人たちが陥りやすい信仰の罠についてこの譬えで教え

ています。神はご自分から遠い存在であると思われている罪人や体の不自由な人たちを『無理にでも……連れて来て』（２３節）神の国の宴会の席に着かせる方です。これに対して自分は義人だと自認している人は、自分が神の国の宴会に招かれているにもかかわらず、招かれた宴会でも上席に座ることを当然のように考え、いざ宴会の日時になったら、自分の都合を優先して招待を断ってしまう人物だというのです。

自分の都合を優先してしまうことは人間に共通していることですし、言い訳を言うのも私たちも自分でよく経験していることです。窮地を脱するための説明で、自分をよく見せようとする心理は誰にでも働くものですが、こと神の国の招待に対してエクスキューズをするのはどうなのでしょうか。

神の招きはいつも誰に対してもあるものです。私はキリスト教の葬儀が初めての礼拝体験でした。礼拝に出るようになっても、それが神の招きによるものだと実感するまで結構時間がかかった気がします。ですから、洗礼を受けるまで３年ほどかかりました。自分の力で人生は切り拓いていくものだと思い込んでいましたから、神に自分を委ねきる覚悟ができるまで３年間かかったように思います。

ですから、小さい時からキリスト教に親しんでいた人のことをうらやましく思っていました。それなりに葛藤はあるでしょうが、キリスト教の信仰が遠い世界のことだと思うことはないのだと思われるからです。今、聖書研究祈祷会ではガラテヤの信徒への手紙を学んでいますが、パウロは異邦人伝道をすることで、原子教会の発端であるエルサレム教会の人たちから避難されていました。エルサレム教会の人たちはユダヤ教の影響を完全には払拭できずに、パウロが行う異邦人伝道に批判的でした。

異邦人というのはユダヤ教を基準にした言い方で、ユダヤ教のことを何も知らない人たちのことです。ユダヤ教から出発したキリスト教は、最初ユダヤ教の一つの教派として出発しました。ですから、ユダヤ教の神ヤハウェについて知らない異邦人に、同じ神であるヤハウェのことが理解できるはずがないと思われていたのです。つまり、パウロの異邦人伝道はユダヤ教の立場からみれば邪道だったのです。けれども、この異邦人伝道がなければ、キリスト教は日本に伝道されることもなかったでしょうし、神の愛に気づく信仰も生まれなかったように思います。

イエスが自分の都合を優先するような信仰を批判したのは、自分が窮地でなくてもエクスキューズしてしまう人間の弱さを批判したのではなく、言い訳をする生き方を、自分が正しい人だと思っている人でもするということです。この現実を踏まえたうえで、神の国の宴会にはこの世でふさわしくないと思われている人でも、神は招いておられるという恵みの事実を教えたものなのです。まだ自分は洗礼を受けるのにふさわしくないと思っている人を神は無理にでも招いておられるこの恵みの事実に心を留めるべきでしょう。

キリスト教信仰が身近にある人にとって、愛の神である方の存在を疑うようなことはないのではないかと思われます。神学校に入りたての頃、学生寮で授業の後、神は存在するかどうかという議論を寮生としていた時に、親が牧師の神学生が「何て無駄なことを議論しているの？　神さまは存在しているに決まっているじゃない」と軽く一蹴されたのを思い出します。自分が窮地でなくても言い訳をしてしまう私たちだからこそ、神は神の国の宴会にどのような人をも無理にでも招いておられるのです。そのような神だからこそ、自分の都合から生まれたような言い訳は無意味となるのです。